

熊本学園大学 外国語学部 第25・26合併号

英米学科 GAZETTE

令和4年6月
発行・編集
熊本学園大学 外国語学部

巻頭言



4月より外国語学部長をしております塩入(しおいり)と申します。どうぞよろしくお願いいたします。専門は日本語教育で、台湾の大学で10年ほど日本語教育に従事し、10年ほど前から本学の日本語教員養成課程を担当しています。日本語教員の資格を取得した英米学科の卒業生の中には国内外で日本語教師として活躍する人も多く、私の誇りです。

コロナ禍の2年間は外国語を学ぶ者にとって試練の時でした。日本語教育の実習も本来は韓国、台湾、NZで行っていましたが、去年はオンラインと国内の実習となりました。一方で、コロナ禍は私たちの眼を地域の異文化に気づかせてくれました。この2年間、科学研究費の助成により県内の外国人技能実習生の日本語支援の試みを行い、多くの英米学科の学生が参加してくれました。また、この春からは日本語教員養成

外国語学部長 塩入 すみ(教授/日本語教育)

課程の実習生を中心に、慶誠高校の留学生の日本語クラスを立ち上げ、熊本市内びぶれす等で活動しています。英語やフランス語で日本語の文法を教え、熊本を紹介する英米学科の学生たちは、熊本にいながらにして「異文化の眼」を獲得しつつあります。実践による学生たちの急速な成長に、うれしい驚きを感じる毎日です。



慶誠高校留学生日本語クラス

左からジョバさん(慶誠高1年)、鈴木友麻さん(英米学科卒業生)、竹原このみさん(英米学科4年)

コロナ禍での日本と進路選択

英米学科長 坂田 直樹
(准教授/英語教育・心理言語学)



4月より英米学科長となりました坂田と申します。(熊本市出身、幼い3人の子育てにも奮闘中です。)どうぞ宜しくお願いいたします。

コロナ禍が始まって、2年が経ちました。このような中、若い方は、激動の時代の中で、進路を悩むことも多いでしょう。そんな時、これからの日本を少しでも良くするために、自分はどうか貢献できるか、という視点に立ってみてはいかがでしょうか。

ここ20年以上、日本の経済的地位は、低下しているように見えます。では、どうやったら、それを上昇

させることができるか、考えたことはありますか。経済的地位は、日本が世界に提供する価値が高まれば、自然と高まります。現在の問題は、日本にある価値を、世界にうまく提供できていないことかもしれません。例えば、九州で生産される美味しい農産物や、美しい自然、文化を、国境を超えてもっと多くの人に味わってもらえれば、それが日本の地位を高めることにつながるでしょう。

日本にある良いもの、良いサービスを、世界の方がより身近に感じられるようになるためには、外国語を駆使して日本を世界とつなぐ、いわゆる「グローバル人材」が、現在よりももっと必要です。若いみなさんは、コロナ禍という短期的な視点に惑わされることなく、これからの時代を見据えた、自分らしい進路選択を考えてみませんか。

研究紹介

比喩と英語教育

TOMEI Joseph (教授/認知言語学)

私の研究分野は認知言語学で、その中で特に比喩と、比喩がどのように学生のライティング能力の向上に役立つかを研究しています。幸い、私の研究分野は学生たちの指導に密接に関連しているため、彼らのアイデアや洞察が魅力的な手がかりにつながることもしばしばです。

認知言語学は、言語はそれ自体個別の能力ではなく、私たちが世界を認識し組織化する能力の一部であると考えます。人間が世界を組織的に捉える方法の1つとして、比喩が使われます。例えば、人々はしばしば人生を旅に例え (LIFE AS A JOURNEY) ます。「人生」を「旅」と捉える表現は特定の表現にとどまらず、さまざまな形で現れ、英語では次のようにいくつもの表現が「人生」と「旅」と捉えることを示しています。例えば、

- i. *He had a rough life.*
- ii. *My life took a strange turn.*
- iii. *I don't know where I'm going with my life.*

これらはすべて、LIFE AS A JOURNEY の例で、どれも人生を人間の歩む道として (平坦ではない、困難な道や、ある方向に道を曲がる、行き先など) 捉えています。実際、日本文学で最も有名な作品の一つである松尾芭蕉の「奥の細道」は、この比喩を中心に構成されています。認知言語学では、誰もが比喩を使うと主張しています。私の研究では、学生たちに比喩を使って創造性や能力を発揮してもらうことを目的としています。

私の博士論文のきっかけは、実は、ある学生の課題から得たものだったのです。題材は Baz Luhrmann 監督の『ロミオとジュリエット』でした。Leonard

DiCaprio がロミオを、Claire Danes がジュリエットを演じた現代版です。ロミオがキャピレット家の舞踏会に忍び込み、ジュリエットを初めて見る有名なシーンで、映画は巨大な水槽の別々の面に二人を映し出しているのです。この学生は、このシーンが、目に見えない壁で隔てられている二人の若者が、その壁を越えたとき、彼らの人生が悲劇に終わるといふ悲劇を要約していると観察していました。これはとても強力な観察であり、この映画の他のレビューや要約では決して指摘されない観察で、そのような指摘をする能力に関心を持ちました。

これがきっかけで、学生に比喩を含むミュージックビデオについて書かせる指導をテーマに研究を行いました。学生はよく自分の英語が正しいかどうかを気にして、間違いを避けようとするあまり常にシンプルな文章に逃げるような書き方をします。しかし、一旦比喩について興味深い解釈を書こうという目的ができると、用いる英語表現が目覚ましい進歩を遂げることが分かりました。このような指導の利点は、教員が生徒を矯正するのではなく、サポートするという点にあります。英語では、教えることについて、'don't be a sage on the stage. Be a guide on the side'. 「壇上の賢者になるな、傍らの案内人になれ」という言葉があります。学園大学で自分の研究を実践に繋げることができるのは、とてもラッキーなことだと考えています。



ゼミ紹介

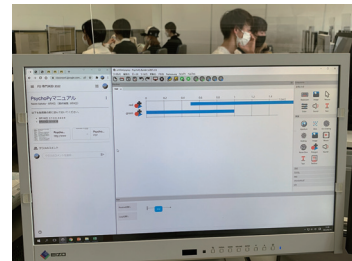
頭の中の英語を調査

坂田 直樹(准教授/英語教育・心理言語学)

自分の頭の中に、どのように「ことば」が入っているか、想像したことはありますか。使う言語が英語であったとしても、日本語であったとしても、相手の言ったことに上手に対応できるのは、頭の中に言語の情報が詰まっているからだと言えます。英語を話せる日本語話者の多くは、母語の日本語と学習した英語を話すバイリンガルです。頭の中には、しっかりとした日本語の基盤があって、その上に英語の情報が入っていると考えられます。英語母語話者とは、頭の中の言語情報は異なりそうです。

私のゼミでは、PsychoPy という心理実験ソフトウェアを使いながら、言語項目の提示に対する反応時間を測定することで、日本語母語の英語学習者における心の中の言語（日本語・英語）情報を明らかにし、英語母語話者とどこが異なるのか、また、どのように工夫すれば、より英語を上手に使えるかを具体的に考えていきます。例えば、英語と日本語では語順が異なりますが、英語で話すとき、これは不利になるのでしょ

うか。やはり、日本語の語順で英語の単語が心に浮かんでしまうのでしょうか。2021 年度から始まった私のゼミですが、これまでの研究テーマは、「カタカナ語（意味ずれ型）は英語学習に影響を与えるのか」「TOEIC の点数と発音の関係性実験」「TOEIC のレベル、英語学習時間の違いによる英単語におけるストレス位置知覚の相違」「品詞が変わるときに語形も変化する英単語と、品詞が変わるときに語形は変化しない英単語の処理の際にシフト・コストが発生するのか」「日本人にとっての英語のカタカナ表記についての再考」「動詞の多義語の理解は英語力に差はあるのか」「洋楽を聴く頻度は英単語発音識別に影響があるのか」「学習状況における言語翻訳の違い」などです。自分が英語学習において、疑問に思っているポイントを、データを集めながら探っているようです。



書籍紹介

渡辺利雄『アメリカ文学に触発された日本の小説』(2014) 研究社

向井 久美子(教授/アメリカ文学)

アメリカと日本の小説で、それぞれ類似したテーマを持つ作品が取り上げられ、比較分析がなされています。もともとオープン・カレッジ（公開講座）の講義が基になっていますので、広く「文化」や「日米比較」に興味のある一般向けの内容になっています。俯瞰的に、アメリカという国家から作品の一部に焦点を当てて、かなり掘り下げた考察がなされている部分もあります。

今興味をひかれるのは、ノーベル文学賞候補の常連で、今年アカデミー賞最優秀外国語映画賞の受賞作「ドライブ・マイ・カー」の原作者、村上春樹に関する分



析です。村上は、アメリカ文学に影響され、アメリカ化した日本に対する一つのアプローチを行っている作家であると考察されています。過去の共同体から離れ、未来に夢や希望（アメリカン・ドリーム）をもって都会へ出るといった話も多く、究極的にアメリカ的な価値観を持つ日本人が、どういう存在になっていくのか、その先をもっと読みたいと思いました。

アメリカ文学で必ず出会うフィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』の村上の翻訳には、誤訳があります。学生たちも実際にその誤訳を目にし、驚きと疑問を持ちます。出版社も承知済みで訂正しないのでしょうか。そんな些細な指摘より、村上の作品に込められた、もっと奥底にある真実の探求、巧みなメタファーの表現を味わうべきだということなのでしょう。

こうした様々な思いを巡らせるキッカケを作ってくれる一冊です。

映画紹介

Ode to my Father (2014)

Judy Yoneoka (Professor, World Englishes)



I am a history nerd. I love all historical books, movies and drama. But too often historical products are politicized, fictionalized and suffer from finger pointing or whitewashing. It is refreshing and thought-provoking, then, to find a movie that portrays various modern-era historical events as they were experienced by one man. Like the 1994 US film Forrest Gump, this is the case in a 2014 Korean movie called 국제시장 in Korean, 国際市場で逢いましょう in Japanese, and Ode to my Father in English.

The first thing that impressed me about this film was how much I learned about modern postwar Korean history. The hero of the film, Duk-Soo, loses track of his father and sister in the evacuation of Hungnam, and waits for their return while running a shop in the international market of Busan. As the “man” of the family, he continues to sacrifice for his mother and siblings, joining government sponsored

programs as a coal miner in Germany and a soldier in Viet Nam. In a scene which brought tears to my eyes, he is reunified via KBS special broadcast with his sister. Hungnam, Germany, Viet Nam, KBS--I was not aware of any of this Korean history, and the plight of a Korean war orphan in my own home town brought a fresh look to a part of history that I had experienced in childhood “from the other side.”

What I loved most about this film was the universal human theme of devotion and sacrifice for family, and how younger people may be blissfully unaware until it is too late. Historical circumstances differ, but this film felt like it could have been an Ode to my own father, whose business suffered after going to war in Europe, or to my husband’s father, who spent his life as a bus driver after returning from Burma. Unlike Forrest Gump, who backs into each life experience through “dumb luck”, Duk-Soo makes deliberate choices for the sake of his family. He is an ordinary man living through extraordinary circumstances. For us, who do not know war or its aftermath, it is a reminder of people who sacrifice for those they love, wherever they are.

ゼミ紹介ページ&Twitter始めました！

英米学科では、各教員の多彩なゼミの魅力をお伝えするゼミ紹介を、ホームページの中に作成しました。また、以前より Instagram と Facebook で学科の授業やイベントをお伝えしていますが、英語学習に役立つ情報を発信する Twitter も新たに開設しましたので、ぜひ、フォローしてみてくださいね！（左から、ホームページのゼミ紹介、Twitter、Instagram、Facebook へのアクセス用 QR コードです）

英米学科ホームページ&SNS



編集人 坂田 直樹

〒862-8680 熊本市中央区大江 2-5-1

TEL: 096-364-5161(代表) Mail: na-sakata@kumagaku.ac.jp